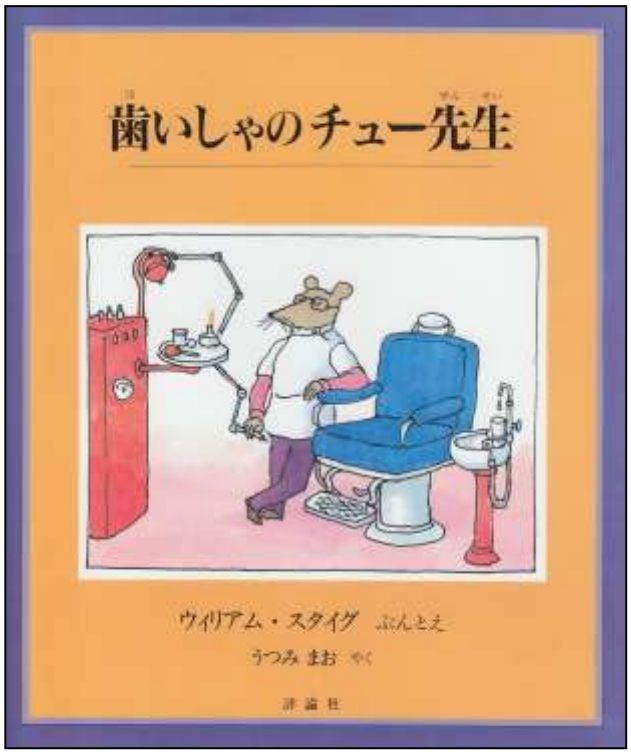
こんな本よんでみましょう

（解説）

1.『りゅうおうさまのたからもの』（E2）

むかし、モンゴルのそうげんにふたりのきょうだいがすんでいました。
あるひ、おとうとはとりにさらわれそうになったさかなをたすけてやりました。するとタツノオトシゴにのったおじいさんがあらわれ、りゅうおうさまのところにつれていかれました。おとうとが、たすけたさかなはりゅうおうさまのむすめだったのです。りゅうおうさまは、おれいに“みずのもと”がはいったきんのはこをくれました。それは ふたをあけてはならないはこだったのですが、なまけもののにいさんがふたをあけてしまい、たいへんなことになってしまうのです。

2.『歯いしゃのチュー先生』（E2）



ねずみの歯いしゃのチュー先生は うでがよくて どんなむし歯も なおしてしまうので 大ひょうばん！ある日 キツネのしんしが むし歯のいたみで なきながらきたので、先生はゆうきをだして 大きなキツネの口の中に はいって ちりょうをしてあげたのですが、、、、おんしらずのキツネは よくじつ あたらしい歯をいれてもらったら、先生とおくさんを たべてやろうとかんがえているみたいです。

さて キツネのそのきもちにきづいた 先生たちはどうやって きりぬけたでしょうか？

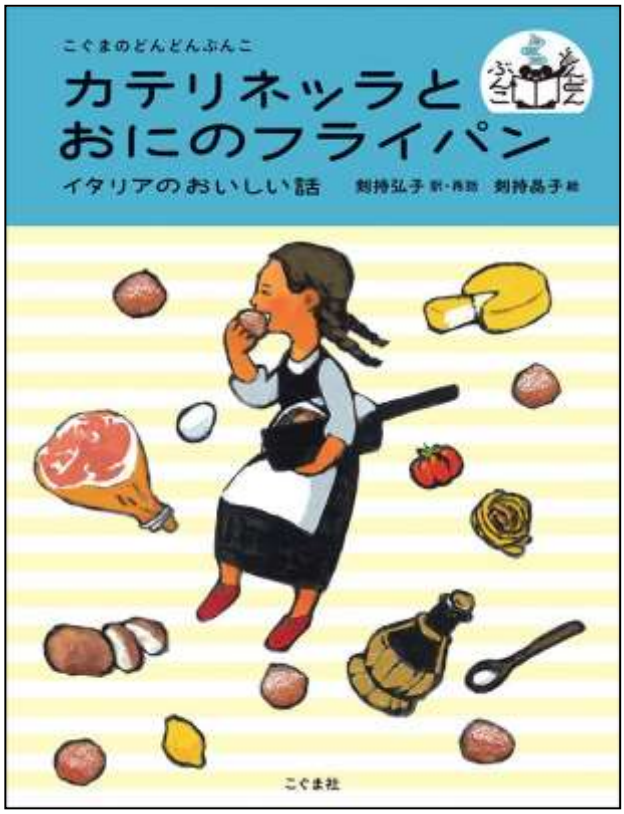
3.『このねこ、うちのねこ！』（E2）

いえが７けんだけの小さな村に やってきた１ぴきの白いねこ。 こっちのいえでは“メリンダ”あっちのいえでは“ミランダ”そのまたあっちのいえでは･･･と７けんそれぞれのいえでちがうなまえをつけてもらい、村のみんなのねこになりました。
ところがあるひ「どのいえも ねこを かわなくては いけない！」と、ほうりつで きまり、やくにんが ねこしらべにやってきます。さあ、たいへん！だって村には１ぴきのねこしかいないんですから。
村のみんなはそうだんをして･･･。
くり返しが楽しい、ぜひ声にだして読んでほしい１冊です。

4.『ネルソンせんせいがきえちゃった！』（E2）

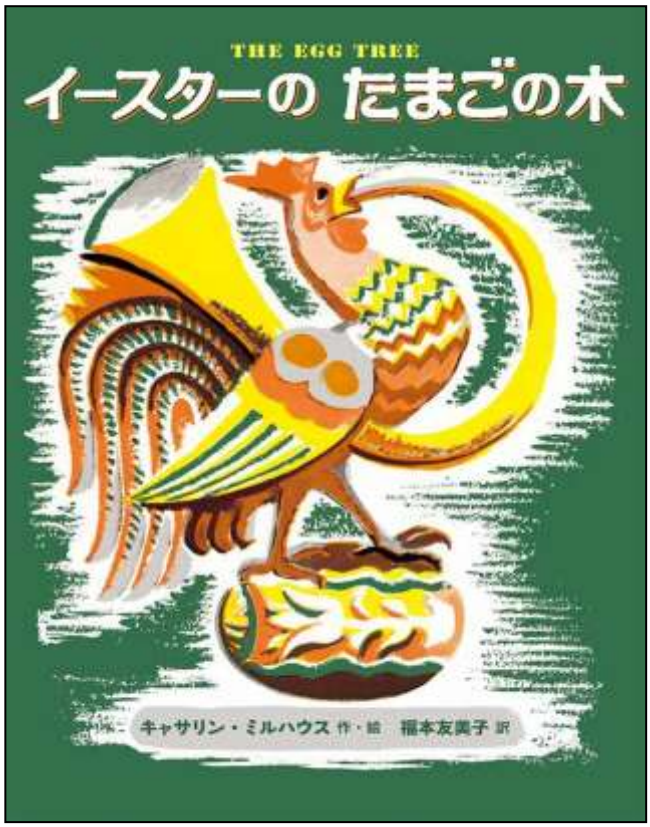
２ねん１くみは、がっこうじゅうで、いちばん、おぎょうぎのわるいクラスです。
たんにんのやさしいネルソンせんせいのいうことを、ちっともききません。
ところが、あるひ、ネルソンせんせいはがっこうにきませんでした。そのかわりにきたのは、くろいぶかっこうなふくをきたスワンプせんせいでした。スワンプせんせいは、まじょみたいに、おそろしいひとでした。スワンプせんせいにびしびししごかれたせいとたちは、ネルソンせんせいにかえってきてほしいとおもうのですが、なんにちたってもあらわれません。ネルソンせんせいはどこにいってしまったのでしょうか？

5.『カテリネッラとおにのフライパン』（JA カテ）



フライパンをかりたおれいに、鬼にドーナツをあげる約束をしたカテリネッラ。
でも、鬼のやしきに行くとちゅう、いいにおいにがまんができず、とうとうドーナツをぜんぶ自分で食べてしまいました!!
さあ、たいへんです。カテリネッラはどうなってしまうの･･･？
この本１冊で、食べものにまつわる イタリアのおいしい昔ばなしがぜんぶで４つ楽しめますよ！

6.『イースターのたまごの木』（JA ミル）

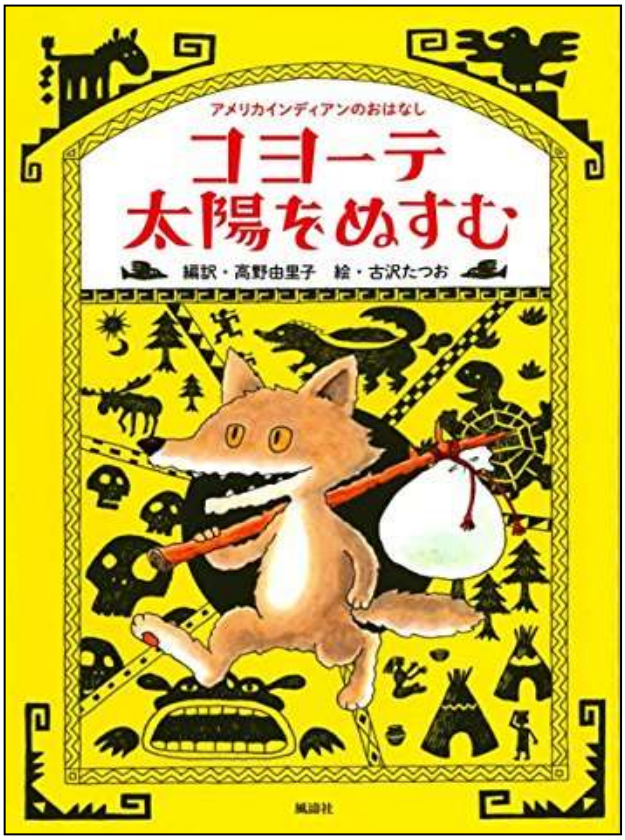


外国には「イースター」という 春をおいわいする おまつりがあって、子どもたちは いのちのシンボルであるたまごに もようや えをつけたり、イースターうさぎが かくした たまごを さがしたり たのしくすごします。

ケイティとカールの きょうだいも おばあちゃんの家の たまごさがしに 今年はじめてさんかしたのでしたが、いとこたちに先をこされて なかなか見つけられず、 ケイティはしょんぼり。そのあと ひとりで とくべつステキなたまごを 見つけるのですが、どこで どんなのをみつけたのでしょうか？

百年も前の おはなしでも たのしいことをしている子どもの心は きっとあなたにもつたわってくるでしょう。

7.『コヨーテ太陽をぬすむ』（JB38）



力は弱いけれど、ずるがしこく たくましく生きぬくコヨーテ。アメリカインディアンに神ともされるコヨーテの７つのお話を集めた１冊です。

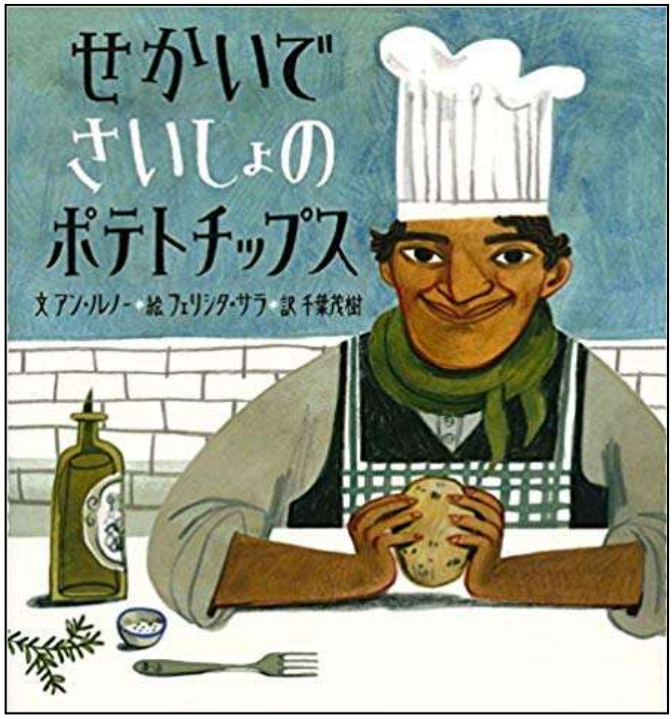
その中の１つ「コヨーテ、夏をぬすむ」は、むかし よのなかが 冬しかなくてさむかったとき、カラスにたのまれたコヨーテが 五人のなかまと もちまえのずるがしこさと ゆうきで、魔術師のおばあさんから 夏を ぬすみ、このよに 夏と冬がめぐるようになったというお話です。ほかの６つのお話も楽しいのでぜひ、よんでみてください！

続編『コヨーテ 七人の巨人とたたかう』もあります。

8.『コクルおばあさんとねこ』（ピア）

コクルおばあさんは、ロンドンの町でふうせん売りをしながら、黒ねこのピーターとくらしていました。ある時、悪いお天気がつづき、さかなを買ってもらえなくなったピーターは、おばあさんの家からとびだしました。おばあさんはいつまでも帰ってこないピーターのことが心配でどんどんやせてしまいます。そんなある日、おばあさんはいつもよりたくさんのふうせんを売ろうと 手にもちました。そのとき、とくべつ つよい風がふいて、おばあさんは空にとばされてしまったのです!!　たいへんです。おばあさんはどうなるの？そしてピーターはどこへいったの？

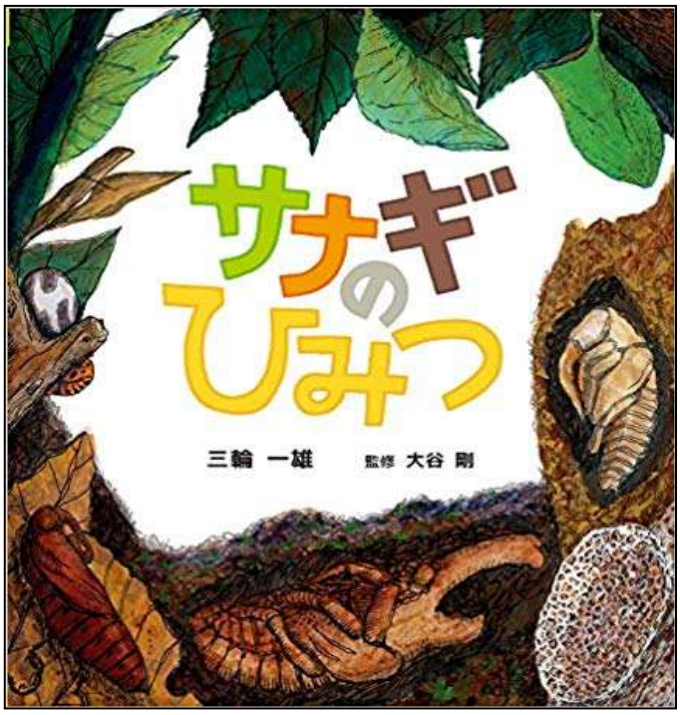
9.『せかいでさいしょのポテトチップス』（E3-3）



ポテトチップスっておいしいよね。だれが最初につくったんだろう？

ここは、アメリカのニューヨーク。クラムさんのレストランに、ひとりの紳士がやってきました。注文は「ポテトだけ、どっさりたべさせてほしい」というものでした。クラムさんは、さっそくじまんのフライド・ポテトをつくって出しました。けれども、紳士は「ぶあつすぎる」「味がしない」と言って、何度も　お皿をつきかえすのです。「ホクホクで、さいこう」のはずのフライド・ポテトをたべてもらえないクラムさんは、それならばといたずらきぶんをはたらかせます。

10.『サナギのひみつ』（486）

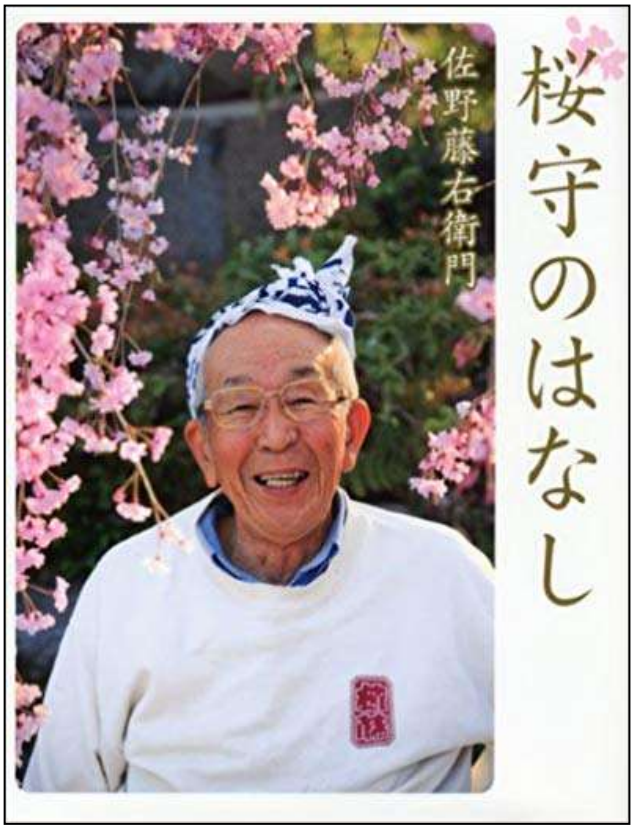


いろいろな生き物のなかでも 親と子が 全くちがう姿をしている 代表がカブトムシやチョウのような昆虫でしょう。その変化するとちゅうが サナギの姿ですが、何のために そんな成長のしかたを するのか、この本をみるとわかってきます。自然って すごいなあ、生き物は エライ！と 小さなものへも尊敬のきもちが わいてくること まちがいなしです。

11.『ピッグル・ウィッグルおばさんの農場』（Bマク）

あなたの周りに“困ったちゃん”はいませんか？
大うそつきに、なんでも分解する子、超こわがりやに、忘れんぼ‥‥
でもご安心を！ピッグル･ウィッグルおばさんにかかれば どんなに こまったくせをもった子も、いつの間にか直って みんな笑顔になってしまいます。
ピッグル･ウィッグルおばさんって まほうつかいなの？　いえいえ、子どもたちは、おばさんの農場で動物たちとくらすだけ！
あなたも 楽しいおばさんの農場に あそびに行ってみませんか！

12.『桜守のはなし』（62）



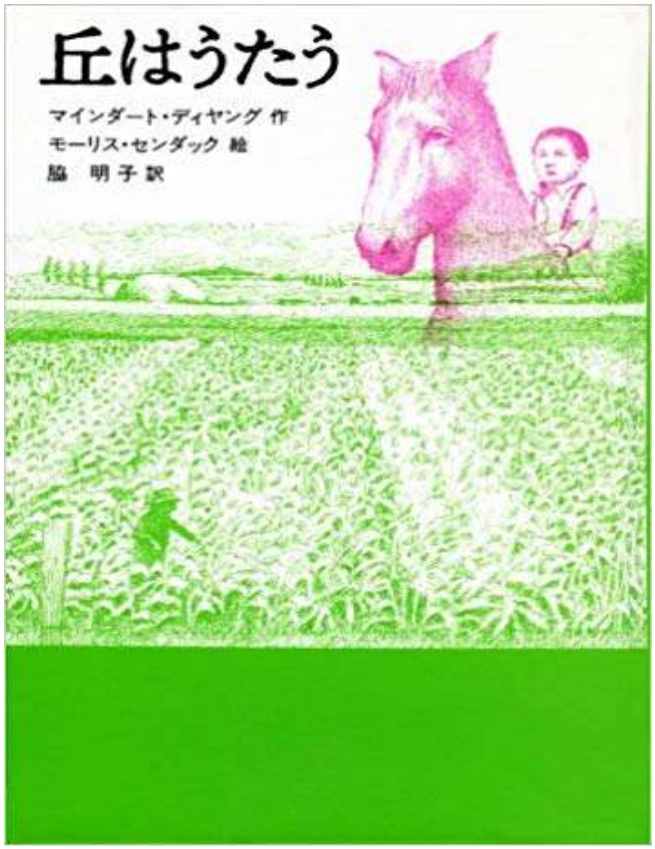
“桜守”という仕事を 知ってますか？
たいていの人は、桜を見るのは１年のうちで満開の時期（３～５日）だけですよね。
１年中桜の声を聞き手塩にかけて守りをする、それが桜守の仕事です。この本の作者の佐野藤右衛門さんは、１８３２年より続く植木職人、“佐野藤右衛門”の十六代目。「桜守」として、日本各地の名桜の保存はもとより、国内外の桜を育てています。
この本は、春には新種を探しに山へ、夏の種まき、秋の紅葉の美しさ、冬の植樹など、みなさんの知らない桜の営みを 美しい写真と藤右衛門さんの声が聞こえるような京都弁の文章で紹介しています。美しい桜と、愛情深い藤右衛門さんに会いに行きたくなる、そんな１冊です。

13.『ぼくたち負け組クラブ』（クレ）

授業中にかくれて本を読んでしまうくらい本が大好きな６年生の男の子アレック。もう何度も校長室おくりになる始末。とうとう「授業態度を変えなければ、夏休みは６週間の補習授業！」と宣告されてしまいます。そして アレックに さらなるピンチが‥！両親の仕事の都合で放課後プログラムに参加しなければならなくなってしまうのです。そこではみんな何かのクラブに入らなければなりません。文化クラブ、スポーツ、宿題、どこにも入りたくないアレックは、本を読むために新しいくらぶを作ることにしました。それは「負け組クラブ」何だか変な名前ですね。でもこの名前にはひみつがあって･･･。

巻末に登場人物が読んでいた本のブックリスト付

14.『丘はうたう』（ディ）

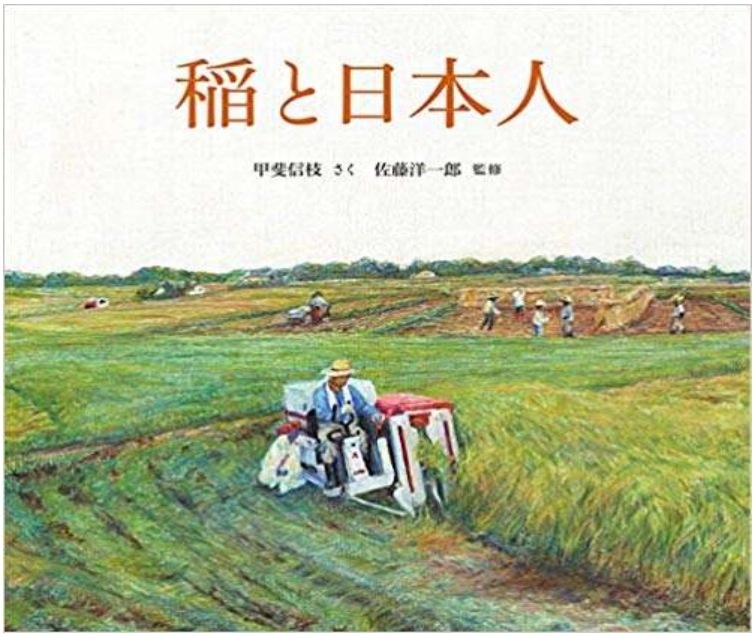


レイの家族はトウモロコシ畑の真ん中にある元農家に引っ越してきました。年のはなれた　姉さんと兄さんがいますが、まだ学校にも行っていないレイのことを一人前にあつかってくれません。お母さんは、いなか暮らしが苦手なようです。話し相手で、遊び相手でもあるお父さんはセールスマンで　週末にしか帰ってきません。

　ある日、レイはトウモロコシ畑をぬけて　丘の上までひとりで行ってみました。するとそこには、一頭の年老いた馬がいました。レイは　家族には内緒で、馬とのふれあいを楽しむのですが、ある時、雨が降ってきて･･･

　あたたかい家族のなかで、レイは自分で考え行動していきます。いなか暮らしは、なんて楽しそうなのでしょう。

15.『稲と日本人』（61）



私たち日本人が ずっと食べてきたお米にはどんな歴史があるか 知っていますか？

もともと暑い地域の植物であった稲(いね)は、ずっと昔 暖かい国から入ってきて、日本の生活をがらりと変えました。でも、すんなりとお米が広がっていったわけではありません。寒い地域(ちいき)や水の少ない土地でも育てられるように、農村の人々がお米を作り変えたり、自然災害(しぜんさいがい)にたちむかったりなどの、長い道のりがあったのです。

植物のかがく絵本で 定評(ていひょう)のある 甲斐信枝(かいのぶえ)さんが描く見開きいっぱいの広い水田の景色は、

〝稲〟が守るべき日本の大事な財産(ざいさん)であることを 私たちに語りかけています。